

早朝からの会合、そして午後からの講演会。その狭間の時間、都心のビジネスホテルの小さな一人用のソファに、背広にネクタイ姿の中村哲がチョコンと座っていた。日焼けした顔、節くれだった手。医師というより肉体労働者の風貌が、背広に抵抗している。

パキスタンそしてアフガニスタンに二十数年踏みとどまり、NGOペシヤワール会の現地代表として山岳無医地域での医療活動から井戸の掘削、灌漑用の水路の建設まで懸命に取り組んできた人。内戦、空爆、旱魃と次々悲しみに見舞われ続けた地で、そこに暮らす人の視線で「国際貢献とは何か」をまさに身をもって問い続けてきた人。アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受賞するなど国際的な評価の高い中村は、小柄で穏やかな目をしていて、どこかお茶目な仕草で初対面の緊張を一瞬にして吸い込んでしまった。

この度の日本滞在は、約一カ月間。アフガニスタンの現状を伝え、活動への支援を訴える。前日は、土木関係者の集まりで灌漑用水路がもたらす大きな恵みについて訥々と語っていた。

「どうも日本にいても落ち着かない。現場におったら気持ちが悪く着くんですが……」

現場とは、医療現場ではなくアフガンの農民たちと灌漑用水路を

命の水に 懸ける

医師

中村哲

医師としての赴任地でアフガンの苦境に直面、命をつなぐ水の大切さを痛感する。医療活動の傍ら、井戸を掘り用水路を建設。長年にわたる地道な活動が、乾いた大地に奇跡のような緑をもたらした。

吉永みち子 文

赤城耕一 写真

text by Michiko Yoshinaga

photographs by Koichi Akagi

建設する作業現場。二〇〇〇年七月に始まった第一期工事十三キロの水路が今年四月に完成した。医師である中村は、この工事の総監督として現場で作業を見守り、自らも重機を運転して働いてきた。中村が日本に滞在している間にも、第二期工事は進められている。

「病院は他の医者に任せています。私でないとできない手術の時には、ペシヤワールの基地病院まで行きます。七時間から八時間かかります。仕事人間なんですよ。患者がいるのにはほったらかして遊びに行く気は

はならないように、現場で作業の進行がどうなっているのか日本にいても気になつてしょうがない。定期的に進捗状況や何か不具合がないか連絡してもらっているけど、電話だとかやはり正確だからね。時間ばっかりかかるし。医療も土木もやはり現場中心です」

アフガニスタン

のことを私たちはどれだけ知っているのだろうか。一九七九年に旧ソ連軍が侵攻し、その後は内戦状態が続き、二十二年もの戦乱によって経済基

盤も都市基盤も破壊され尽くし、多くの難民が生まれた。その後タリバン政権が誕生したが、二〇〇一年九月十一日のテロの報復でアメリカの空爆にさらされ、やがてタリバンは崩壊。カルザイ暫定政府誕生後は、すっかり忘れ去ってしまったように思える。

外国軍の侵攻、内戦、空爆という出来事には興味を持って、最も重要なはずの、そのことがそこで生活している人々に何をもたらしたのかということには関心は薄い。

「二〇〇〇年までの難民は戦火によるものでしたが、それ以降の難民は旱魃によるものなんです。七〇年代のアフガニスタンは緑豊かな国で、国民の九割を占める農民は自給自足の生活を営んでいた。あの頃、世界を放浪するヒッピーの通過点で、誰もが『あんなすばらしい国はなかった』と言うくらいだったんです。でもその後のわずか三、四十年で見える影もなくなつてしまった。旱魃と洪水で前代未聞の砂漠化が進んだのです。アメリカはアフガンに九・一一のテロの報復爆撃をしたけれど、農民にとってはそれどころではなかったんですよ。砂漠化の原因は明らかに地球温暖化です。消費と生産を無限大に繰り返さないと成り立たない経済の仕組みと、先進諸国の贅沢のツケがアフガンの農民に回ってきたようなものです。国民の九割が、生きていくための生存空



hitotoki interview : [Nakamura Tetsu](#)

【なかむら てつ】

1946年、福岡県生まれ。81年九州大学医学部卒業後、医療施設勤務を経て84年、パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携わる傍ら、井戸の掘削や灌漑用水路の建設に取り組む。03年のマグサイサイ賞・平和と国際理解部門をはじめ受賞多数。著書に『ペシャワールにて』『医者 井戸を掘る』（石風社）、『ほんとうのアフガニスタン』（光文社）などがある。ペシャワール会現地代表。ペシャワール会 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

間そのものが消滅していく恐怖にさらされていたんです」

アメリカの攻撃がイラクに移り、国際社会の興味もイラクに移ってから、アフガンではタリバン政権下で禁止されていた麻薬の原料になるケシの花の栽培が増えているという。農民は乾いた土地でも育つケシの栽培で辛うじて命を保つ。麻薬取り締まりのため政府がケシ畑を伐採すると、餓死する農民や難民が生み出される。

ケシに頼らずに生きていく道は、乾いた大地を水で潤すこと。水があれば、穀物や野菜を再び栽培できる。水があり、食べ物があれば、貧困から抜け出すことができ、それが病気の苦しみから救われることにもつながる。



「診療所で診る病気のひとつが、十分な水と食べ物があればからなかった病気でした。狭い意味の医療行為をすることが何か虚しく感じられてきてね。薬や手術で飢えや渇きを治すわけにはいかない。医療以前の問題を何とかしないとどうにもならないと思うようになってたんです」

まずは、

アフガン東部の中心地ジャラバードに「水源対策事務所」を設け、医療活動と平行して飲料水確保のための井戸掘りを始めた。やがて、数千ヘクタールを潤して農業を取り戻す用水路建設事業へと大きく一歩踏み出した。

「一〇〇の診療所より一本の水路」と唱えて、農民たちとともに灌漑用水路建設に身を投じた中村は、白衣を脱いで作業着に着替えた。

「診療所で患者を診るのと現場で作業を指揮するのでは、働き方が違うだけ。医者は命を救う仕事で、命が助かることが目的なわけだから、水と食べ物によって病気になるらずに命が失われなくて済むための仕事も結局は同じことですよ」

白衣から作業着へという変化は、中村の中では決して大きな変化ではなく、極めて自然な一本の道の上にあられたことというわけだ。「ただね、仕事には向き不向きって

hitotoki interview : Nakamura Tetsu

のがあって、僕は白衣着て医者やっているより、土木作業現場で働いている方が向いてたような気がします。気がつくのがちよつと遅かったけど、今の仕事、幸せなんです」

実際に現場で働いているのは、土木工事の専門家ではない。地元の農民たちである。水がなくて難民化していたがもう一度農業で生きたいと戻ってきた人たちだから、水への思いは共有できる。しかし、水路が完成するまでには長い時間を要する。言葉も違うし、文化も違う、機械が揃っていないわけでもない。そんな過酷な状況で、アフガンの人たちと心を重ねていくのはそう簡単なことではないはずだ。

「そういう意味では苦勞の連続だったと言つていいかもしれない。でもね、アフガンの人間関係の基本は、地縁血縁なんですよ。私が生まれ育った九州でも、当時は同じように地縁血縁を無視しては生きていけなかったですから、昔の日本人に近い。だから人間と人間がぶつかり合いながら、人情の機微で物事をおさめていく。主人の義経を打ち据える弁慶の心の内を察した富樫が、義経とわかっているながら関所を通過させるつて安宅の関の話があるでしょ。あの気合で乗り切っていく」

目の前の中村が、戦前の九州、官営八幡製鉄所を望む若松港を舞台

に、港湾荷役の荒くれ男たちを度胸と男気で束ねた『花と龍』の主人公・玉井金五郎と重なってくる。生き様だけでなく、顔もそっくりである。玉井金五郎は、中村の母方の祖父にあたる。作家の火野葦平は母の兄で中村の伯父になる。

「親戚の中でも、僕が一番顔が似ていると言われます。祖父の影響というのとは話としては面白いけど、僕が知ってる金さんはもうおじいちゃん、外では威勢がよかったかもしれないけど、内ではおばあちゃんに頭が上がらなかったしね」

生き方に大きな影響を与えたのは、祖母の玉井マンの方ではなかったかと中村は言う。長火鉢の前にとんと座り、長キセルで煙草を吸っているマンの姿は、玉井家の人々に安心感を与える拠り所であったようだ。そんな祖母が、孫の中村に繰り返し説教したことは、弱い人は率先してかばうこと、職業に貴賤はないこと、どんな小さな命でも尊ぶべきであること、そして曲がったことは許さないという姿勢。それが、自然に中村の生き方の礎になっていた。

昆虫が

大好きで、昆虫学を学びたかった中村が、九州大学の医学部に進んだのも、当時問題になっていた医療過疎があった。趣味か

「アフガンの人たちにとって医療や薬以前の問題は水、それが現実なんです」

使命感かで揺れ動きながら、とりあえず医学部に進んだ。農学部から医学部への転部は難しいが、医学部から農学部への転部はできるという納得の仕方をした。結局、農学部へは転部せずに医師になり、昆虫は趣味の世界にとどめた。

大牟田の病院に神経科医として勤務していた中村は、その頃に福岡登高会の遠征隊に加わり、ヒンズークシ山脈に行っている。氷河時代の遺物といわれる昆虫や、珍しい蝶が多く生息する地に惹かれての旅だった。

そんな中村が医師としてアフガンと国境を接するパキスタンのペシヤワールに医師として赴任するきっかけになったのは、JOCIS(日本キリスト教海外医療協力会)からの医師派遣要請だった。

イスラム圏への初めての医師派遣に戸惑う人たちの中で、中村が名乗り出た。

「人が感動するのは、きっと高貴な志と使命感に燃えてというストーリーなんだろけど、実際はそんな高尚な話じゃないんです。そこならヒンズークシの山にちよくちよく行けるかなという個人的な趣味や趣向もまぎっていたわけだね」

自分の歩んできた道が、揺るぎない使命感に燃えて、艱難辛苦に打ち勝ってきたひと筋の道と解釈されるのを恐れるように、岐路に

立った自分の中の揺れる思いや折り合いや軽やかさを口にする。が、妻や幼い子どもたちも一緒に六年間の現地での生活を決意するのはそう簡単なことではないと思われる。

ペシヤワールはパキスタンの北西辺境州の州都。八四年に赴任した中村が、最初に取り組んだのはハンセン病の撲滅だった。やることは際限なく存在した。病棟を改造して手術室をつくり、再建外科の創設、リハビリ施設、ついには感覚麻痺による足底潰瘍を防ぐためのサンダル工房までつくった。

「腰を据えてやらなければダメだと思ったのは、赴任して四年くらいたった頃。六年の任期を終えてからは、ずっと単身赴任です」

中村が赴任した頃のペシヤワールには、国境を接したアフガンで悲惨



2004年2月、アフガニスタンのマルワリード用水路第一期工事の現場で。photo: ペシヤワール会

な内戦が繰り広げられていて、たくさんさんの難民がなだれ込んでいた。難民キャンプでの医療活動を始めた中村は、アフガンの国内診療所設置へと動き出した。アフガンとの縁はこの時に本格的に始まって、次々に目の前にあらわれる事態に何をするべきか考えながら一歩ずつ進んできた。いつのまにか作業現場にいたということになる。

「八四年に医師としてペシヤワールに赴任した時は、二十年后に本業をそっちのけでアフガンで井戸掘りや水路建設現場で朝から晩まで働いている自分など、夢にも思っていなかったですね。自分でこうしようと思っただけの通りになる人生なんてほとんどないですから。昆虫との出会いから始まって、様々な人たちの出会いが山襲のように重なり合って、今の自分はここにいるんだと思いますね」

これまで

掘った井戸は一五〇〇以上。灌漑用水路は十三キロからさらに延びる。アフガンに戻れば、朝五時から作業の毎日が待っている。これから取り組む戦略はふたつ。標高三〇〇〇メートル級の山からは、春先に一気に流れる洪水を防いで無駄なく地表に水を確保するために無数の溜め池を作る。標高六〇〇〇メートル以上の山からの水は用水路で乾いた土地に引

き込む。やがて緑が戻った大地から、上昇気流が起きて夕立になる。「緑の大地が下から雨を呼ぶのを楽しみに夢見ているんです」

中村が今一番幸せを感じるのは、現場で重機を一心不乱に運転している時だという。

「雑念がないし、自分のしている作業がそのまま形になってくる。ああ、今日はここまで進んだって実感できるし。ただこの幸せは有限でしてね。つまり年ですね。二十年后は八十歳過ぎですよ。さみしいけど、あと十数年かな。でも、ここまで来るともう怖いものはない。やるだけやって、周囲に『じいちゃん、危ないよ』って言われたら、『そうか。あとは君たちががんばってくれ』と身を引こうと思っています」

ちょうど昼時。街にあふれた学生や若いサラリーマンが、ボストンバッグを手には向かって飄々と歩く中村とすれ違っていく。人の幸せとは何なのか、目を凝らして自分で感じ取ってほしいという中村の若者たちへのメッセージを重ねながら見送った。

【よしながみちこ】

1950年、埼玉県生まれ。競馬新聞「勝馬」「日刊ゲンダイ」の記者を経て作家活動へ。85年、「気がつけば騎手の女房」で大宅壮一ノンフィクション大賞を受賞。著書に「母と娘の40年戦争」(集英社文庫)、「どこゆく? 団塊男 どうする! 団塊女」(日本経済新聞社)などがある。